

高岡銅器

分業・専門特化した匠の技を、キャラクター銅像などに活かす



キャラクター銅像ブームに火をつけた「こちら亀有公園前派出所」の両さん銅像

全国から高岡に、キャラクター銅像の依頼が殺到

“高岡銅器”で知られる富山県高岡市。その歴史は、1611年に前田利長が産業振興のため7人の鋳物師を高岡に連れてきたことにはじまる。以来、400年以上、高岡は工芸品や仏具・仏像をはじめとした銅鋳造の町として栄えてきた。市の中心部にある金屋町には、格子作りの家が軒を連ねた昔ながらの風情ある町並みが保存され、いまも鋳造、色付け、彫金などの職人が現役で活躍している。そんな高岡に、町おこしの起爆剤として注目される“キャラクター銅像”の依頼が、全国から舞い込んでいる。確かに日本最古の銅像である兼六園の日本武尊は、高岡の職人がつくっているが、なぜ高岡は銅像に強いのか。東京都JR亀有駅前の「こち亀の両さん銅像」を製作した株式会社竹中銅器にお話を伺った。



路面には銅片も埋め込まれ、銅の町の雰囲気を出している

製造過程を分業し、それぞれ腕を磨いてきたことが強み

「キャラクター銅像のブームは、鳥取県境港がゲゲゲの鬼太郎の銅像で町おこしをはじめたことがきっかけで、それに拍車をかけたのが「こち亀」で知られる東京亀有の両さん銅像。亀有には全国の商工関係者が見学に訪れたそうです」と営業部 取締役部長鉢呂氏。(株)竹中銅器は、歴史上の人物や両さんをはじめ、キャラクター銅像を、日本全国に2000体以上を納めている。敦賀にはスリーナインや宇宙戦艦ヤマトが二十数体、最近では葛飾区の依頼でキャプテン翼の銅像も手がけた。「元々うちは、色付け業からはじまった会社で、いまは卸業に移行しています。簡単にいうと工場を持たないメーカーです」。卸業とは、銅器や銅像の総合プロデューサー。まずどういった製品が必要にマッチしているかを考え、デザインを行う。それを当社指定の製造工場で鋳物にしてもらい、



株式会社竹中銅器 営業部 取締役部長 鉢呂 克彦氏

色付けをし、完成させて売り込んでいく。「このデザインを行うのが、原型師や作家先生で、他社は1人か2人ですが当社には10人以上いますので、依頼された予算や内容に合わせて幅広い対応ができます」。

そもそも高岡は、地金、原型、鋳造、加工、仕上げ、彫金、着色と製造過程を分業し、それぞれ専門の職人・会社が技を磨いてきた歴史を持つ。その匠の技が、2次元の世界を3次元に表現する仏像・銅像の伝統工芸となり、いまはキャラクター銅像に活かされている。しかし、この分業・専門化が、高岡銅器が今後も継続できるかの、諸刃の剣にもなっているとか。

400年続いた高岡銅器を次の500年につなぐ工夫

「問題は、技術者の高齢化です」と話すのは、高岡市デザイン・工芸センターの高川 昭良所長。「高岡市では、後継者育成の養成スクールを開き、骨のありそうな若者には親方がマンツーマンで指導にあたり、伝統技術を伝えようとしています」。しかし、問題はそれだけではない。「高岡銅器は、分業化により原型、鋳物、彫金など、それぞれが専門特化して素晴らしい発展を遂げました。しかし、いくら希少な技術でも、いまは需要が減り、これまでの仕事だけでは苦しくなっています」。分業されているため、その会社がなくなると、その技がそこで途絶えてしまう恐れもある。「キャラクター銅像のように“そこにはないものを、立体の形にできる”のが私たちの強みです。新しい時代のニーズやライフスタイルに合った新商品の開発・提案を行い、それをアピールする雑誌を発行したり、また文化財修復というプロジェクトも立ち上げるなど工夫を凝らしています。400年続いた高岡銅器の匠の技を後世に伝え、次の500年につなげることが、私たちの使命です」。



高岡市デザイン・工芸センター 所長 高川 昭良氏



竹中銅器の手になる両さん、キャプテン翼像